



コンソーシアム名

高齢者生活支援システム「LASHIC」と歩容解析サービス「トルト」（補助事業実施期間中に「ケアコチ」より変更）による高齢者自立支援コンソーシアム



事業実施概要

「LASHIC」と「トルト」から得られる情報をAPI連携を通じて集約することで、高齢者の自立支援を図るために把握すべき「生活状況、健康状態、身体機能」情報を網羅的に収集する。個々人の状態をより高精度で見える化することを通じ、従来のアナログな業務からくる非効率な運営コストや介護スタッフ間のコミュニケーションコストを削減する。



コンソーシアム構成員

中小ユーザ企業

- ・株式会社寿（茨城）
- ・日建ヘルスメディカル株式会社（茨城）

ITベンダ

- ・インフィック株式会社（静岡）
- ・株式会社エクサホームケア（東京）
- ・株式会社エクサウィザーズ（東京）



対象とするITツール

- ◆ LASHIC：空間センサー（LASHIC-room）、睡眠センサー（LASHIC-sleep）、相互通話機能付ナースコール（LASHIC-call）を居室に設置し、温度、湿度、照度、運動量及びベッド上での心拍や体動をAIで解析することで異常を検知する。
- ◆ トルト：AIを用いた歩容解析を通じて高齢者の変化を見える化し、身体機能の客観的な評価に基づき個々人に合ったサービスを提案することで、高齢者や家族の満足度向上を実現する。



定量目標値

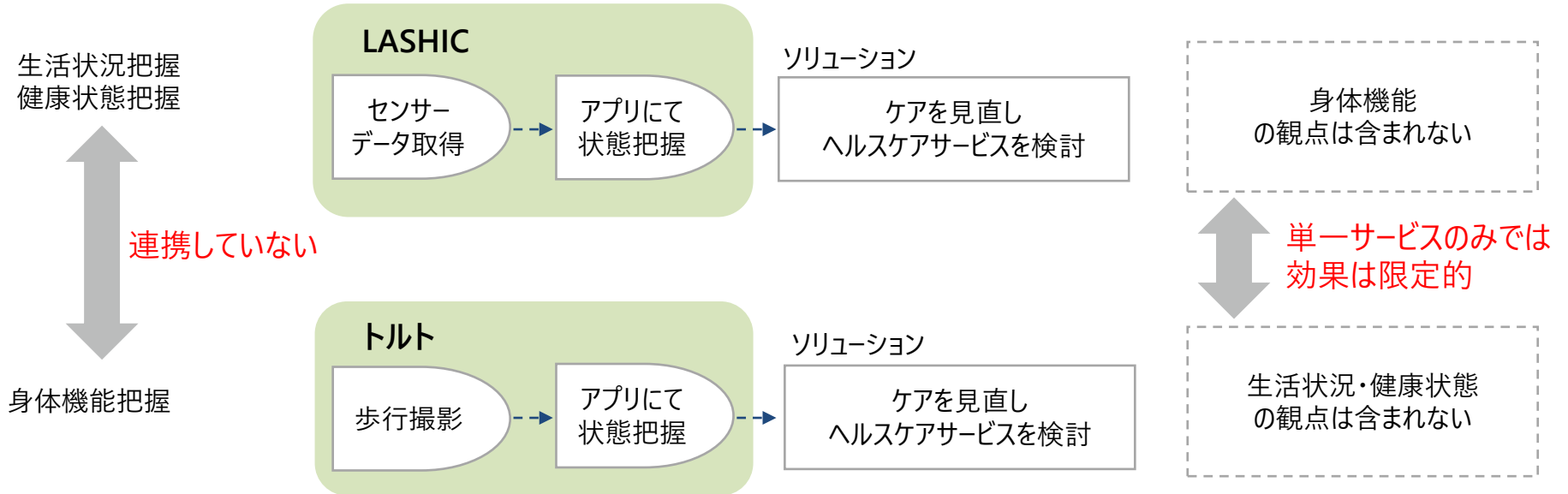
株式会社寿：介護事故・ヒヤリハットの減少率
【1年後】5% 【2年後】10% 【3年後】15%

日建ヘルスメディカル株式会社：離職率の減少率
【1年後】10% 【2年後】20% 【3年後】30%

1. 現状業務の課題

高齢者の自立支援を図るために把握すべき「生活状況、健康状態、身体機能」情報のうち、「LASHIC」「トルト」ともに収集できる範囲が限定的であるため、網羅的に分析したソリューション展開ができておらず、介護スタッフによるアナログな測定や過去の経験則に頼る非効率な業務運営から脱却できていない。

現状（交付申請時点）の業務フロー（Before）



現状

高齢者の自立支援という目的は同一であるが、各システムが連動していない。いずれか一方の観点からしか状態把握が不可能であり、もう一方はアナログな測定や経験値に頼った業務運営をせざるを得ない。

課題

単一サービスのみでは、効果は限定的であり介護スタッフのアナログな業務を効率化するには限界がある。

■ ...ITツールのカバー範囲

○ ...システム操作

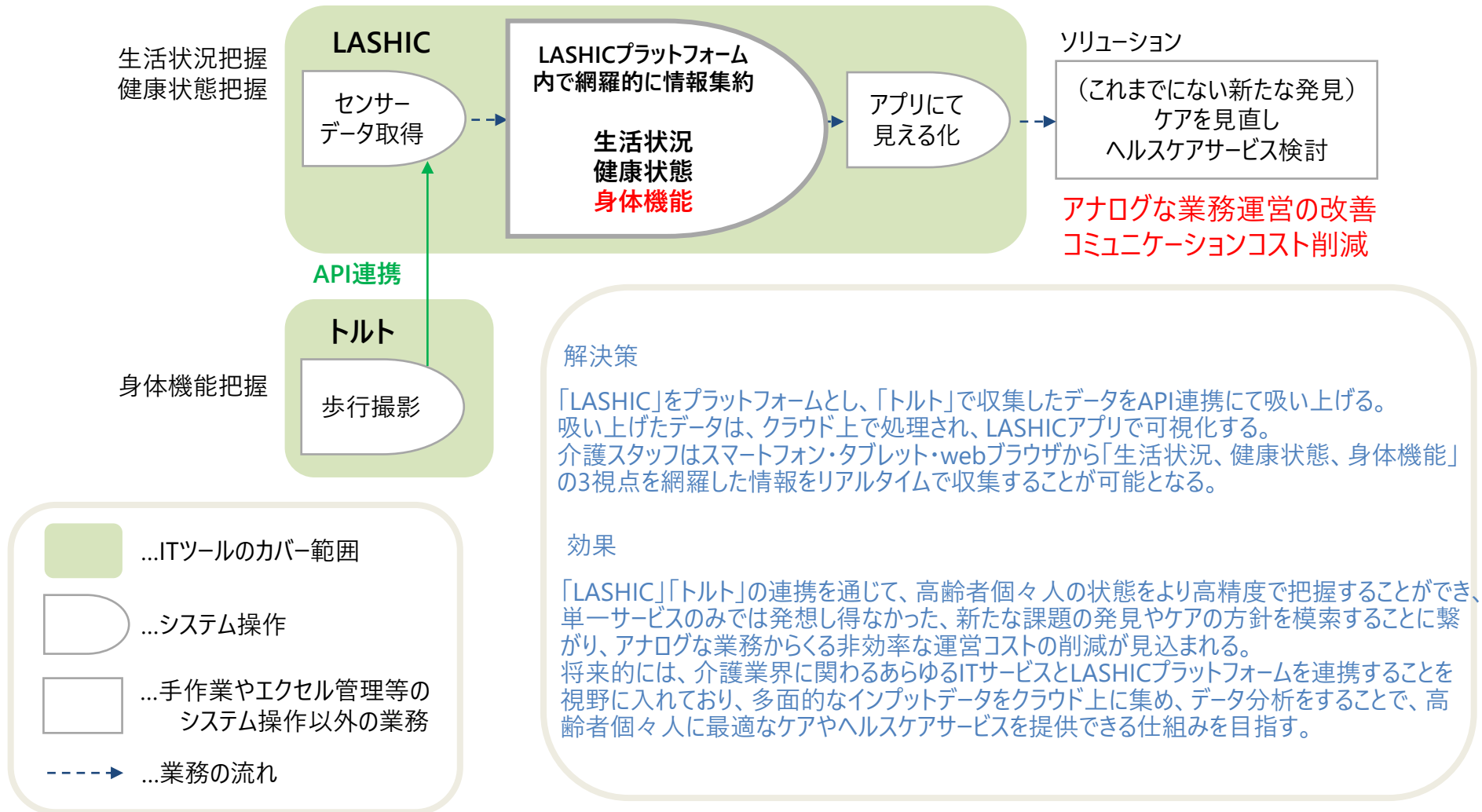
□ ...手作業やエクセル管理等のシステム操作以外の業務

---> ...業務の流れ

2. 解決策と効果

「LASHIC」「トルト」の連携を通じて情報を網羅的に把握することで、高齢者個々人の状態を高精度で見える化することができ、アナログな業務からくる非効率な運営コストやスタッフ間のコミュニケーションコストを削減可能。労働生産性向上（年率3%）、介護事故・ヒヤリハットの改善（年率3%）が見込まれる。

本事業実施後の業務フロー（After）



3-1. 事業詳細

🎯 取り組みのきっかけ

■ 介護現場における情報の可視化

介護現場では利用者個々人に合わせた過不足のないケアを求められているが、そのためには利用者のフィジカルデータ（身体機能）と見守りデータ（居室内の温度や湿度等）を網羅的に見える化する必要があった。

💡 本事業における課題と対策

■ コロナ禍による業務の繁忙を考慮した進捗管理

介護業界は他業界と比べ、ITリテラシーが低く、IT機器の浸透に時間を要する業界であることから、定着に向けハンズオン支援を実施。並走してコンソーシアムにて介護人材向けのIT教育プログラムの実装なども進めている

📊 期待される効果

■ 勘や経験からの脱却

収集した情報について、アプリを通じて見える化を図ることで、従来、経験則に基づき発信していた情報をエビデンスに基づくものに代替することが可能となるため、業務の標準化が図れると共にケアの品質向上も期待できる

【After】

ベッドに設置した見守りセンサー
（寝起き情報等を感知）



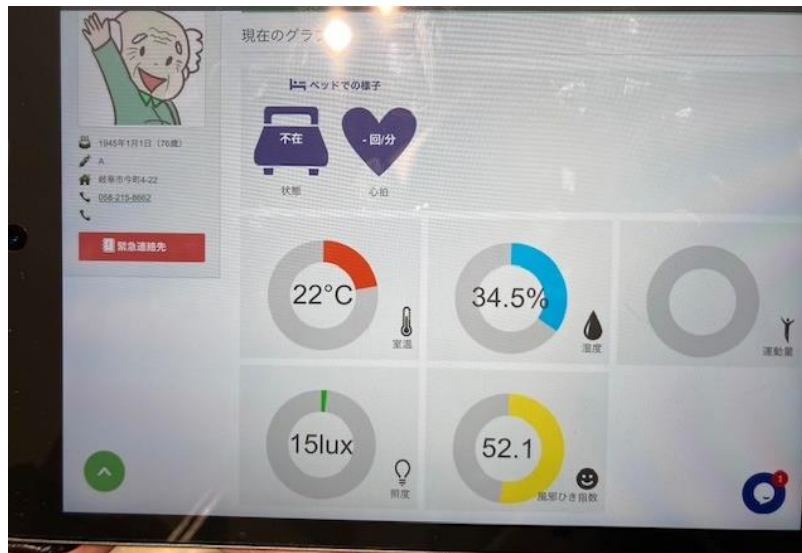
【After】

部屋に設置した見守りセンサー
（温度・湿度等を感知）



【After】

上記各種センサーで感知した情報を、iPadの画面に一元化して表示



3-2. 事業詳細

🔧 共創のポイント

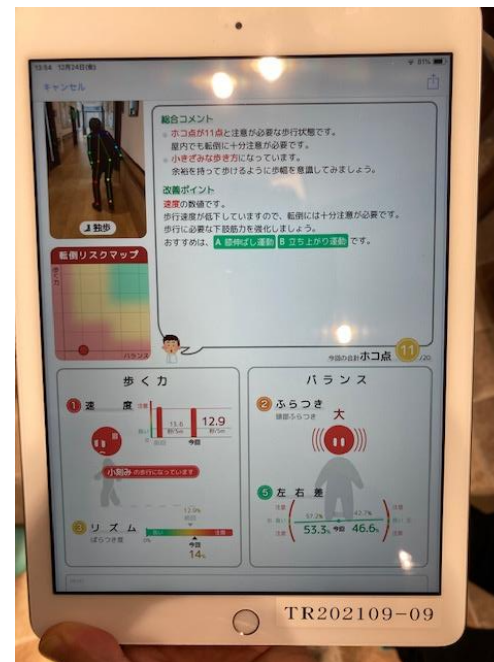
■ 現場の業務を精緻に理解した上でITツールを構築
介護事業所におけるベテラン職員が、ケアに当たりどういった変化に敏感に対応しているか（寝起きの音やトイレの音を聞き流さない等）を確認し、ベテラン以外の職員も対応できるようにするために必要な情報の整備などを進めている

👂 現場ユーザの声

■ 職員全員がリアルタイムでカルテを同時参照可能
情報の見える化により、利用者家族へ入居者の状況等を説明する際も非常に便利である。また、情報が整備された環境の中で利用者が過ごしていることが利用者家族にも伝わるため、エビデンス能力が高いことから安心感を感じてもらいやすい

📈 今後の展望・普及展開

■ 病院間の情報共有の効率化
事業後は、介護業界に関わるあらゆるITサービスとLASHICプラットフォームを連携することを検討。多面的なインプットデータをクラウド上に集め、データ分析をすることで、高齢者個々人に最適なケアやヘルスケアサービスを提供できる仕組みを目指す



【After】
歩容データについてもiPad上に統合することで、分析を促進
(例：トイレに行く回数が減少している→身体機能が落ちているかなどを迅速に分析することが可能)



【After】
介護の必要度合は利用者個々人によって異なる。介護が必要でない人にまで過度にケアを実施してしまうと自立に繋がらず、却って悪影響になってしまうため、過不足のない介護が現場では求められている